

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (教育学)	氏名	辻 香代
論文題目	母語使用を取り入れた外国語ライティング教育に関する研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文の目的は、外国語 (英語) ライティング方略としての母語使用に着目し、国内外の理論的・実証的研究を踏まえたライティングプロセス・モデルを構築すること、母語使用を取り入れるべき具体的な認知プロセスを検討すること、その上で、プロセスを重視した英語ライティング授業を開発し、その効果を検討することにあつた。</p> <p>本論文は4部構成で、問題と目的 (第1~3章)、授業デザインの検討 (第4~6章)、量的・質的検討 (第7~10章)、総合考察 (第11章) であつた。</p> <p>第1章では、国際情勢、社会経済状況、大学制度等からの影響を受け、日本の大学英語教育を取り巻く環境がどのように変化したのかを概観した。英語による文章コミュニケーション能力の育成に重点が置かれ、初年次教育やライティングセンターとの連携が図られる等、組織的に「書くこと」が支援されてきたが、各種統計により必ずしも大学生の英語ライティング力が向上していないことが指摘された。</p> <p>第2章では、国内外の母語使用に関する先行研究を通じて、外国語教育における母語使用の有効性を検討した。その結果、全レベルの学習者に母語使用の意義があること、学習者に馴染みの低いタスクの達成に母語使用が寄与すること、学習者の外国語レベルにより母語使用の用途が異なることが示された。特に、初級・中級英語学習者には、英語テキスト上の包括的要素 (文章の構成・内容等) と局所的箇所 (各センテンスの可読性) の発展を志向した母語使用が有益であることが示唆された。次に、主要なライティング・プロセス (計画し、文章化し、推敲する) における母語使用の教育的効果を検討した。結果、「計画」から「英語による文章化」への移行に認知負荷がかかることが明らかとなり、両プロセスをより円滑に繋げる認知的プロセス、即ち、母語による文章化 (「L1 文章化」と表記) の必要性が示唆された。以上を踏まえ、「L1 文章化」が英語テキスト・クオリティの発展に寄与する可能性に着眼し、4 フェーズ (計画し、母語で文章化し、英語に文章化し、推敲する) を有する「初級・中級者向けの英語ライティングプロセス・仮モデル」を仮構した。</p> <p>第3章では、ライティング・プロセスの枠組みに基づいて、国内におけるプロセス重視の英語ライティング授業実践を整理し、その意義について検討を行った。結果、「L1 文章化」が十分に扱われてこなかったことが確認された。しかし、これまでの検討から「L1 文章化」が英語テキストの発展に寄与する可能性は十分にあると考えられ、英語テキストの発展を志向した「L1 文章化」の有効性を検証することとした。</p> <p>第4章では、学習成果の実現に直結する「L1 文章化」の学習目標を決定した。調査対象者に課すライティング・タスクを議論型 (意見展開型) のエッセイに設定した上で、包括的要素に関する学習目標を、各モジュール (主張・理由・根拠・結論) 間の整合性を確保すること、各モジュールの内容を具体化させることとした。また、局所的箇所に関する学習目標として、和文英訳プロセスを基盤に開発が進められている機械翻訳の言語処理プロセスに着眼し、制限用語をもとに6つの観点を抽出した。</p> <p>第5章では、初級・中級英語学習者が育むべき要素を反映させた評価観点と観点を説明を設定し、尺度毎に評価基準を記したルーブリックを開発した。モジュール・ライティング技法を土台とし、「論理性 (各モジュール間の論証性)」と「明示性 (各モジュール情報の具体性)」を設定し、6段階の尺度毎にそれぞれの評価基準を示した。また、英語テキスト評価指標であることから、英語 (英語センテンスの構築) の観点</p>			

を設け、6段階の評価基準を提示した。本ルーブリックを用いた評価の信頼性・妥当性の検討も確認し、教育実践における実用可能性を示し得た。

第6章では、文章産出過程に深く関与するメタ認知を高めるという観点から、教育・学習方法（教員関与、協働活動、個人活動）を決定し、認知心理学、脳科学、第二言語習得の研究領域等から見た各方法が学習者の学びに与える利点を説明した。また、各方法の利点が最大限に活かされるよう、インストラクショナルデザイン（ID）の第一原理の5要素（問題の提示、活性化、例示、応用、統合）にそれぞれの方法を組み入れ、学習内容が実践に活かされるような授業の進め方を決定したうえで、文章の包括的要素及び局所的箇所に関する言語活動の詳細を説明した。

第7章では、事前調査として、学習者が「L1文章化」の言語活動、即ち、母語文章形成活動をどのように認識するのかを調査した。その結果、9割を超える調査参加者が、母語文章形成活動を「より良い英語テキストの産出に貢献する活動」として肯定的に捉えていることが示された。

第8章では、「L1文章化」の包括的要素に焦点を合わせて、英語テキスト・クオリティに与える影響について調査した。統計的検討の結果、英語テキスト上の包括的要素の発展に対する「L1文章化」の有効性が示された。また、実験群に的を絞った英語テキスト考察により、英語力が相対的に低い場合には、母語テキスト上の発展が英語テキストに円滑に移転されないという課題も示された。

第9章では、モジュール・ライティング技法をもとにライティング枠組みを構築し、「L1文章化」の活動に導入し、英語テキスト・クオリティに影響を与えるのかどうかを検証した。統計的検討の結果、当該枠組みの活用は学習者の意識をモジュールへと向けさせ、各モジュールの相互関係、及び、内容の妥当性に関する検討に肯定的に関与することが明らかとなった。

第10章では、「L1文章化」の局所的箇所に焦点を合わせて、英語センテンスの可読性に与える影響について調査した。具体的には、CL留意事項を基盤として母語センテンスを整える活動を考案し、母語パラフレーズ活動が英語センテンスの可読性に与える影響について検討を行った。統計的検討においては、当該活動の有効性が十分に確認されなかったが、母語パラフレーズを実施した学習者の活動前後における英語センテンスの質的な考察から、CL留意事項を基盤とした学びが英語センテンスの可読性を高めることに繋がったことが示された。

第11章では、論理的手続きによって進められた本研究から得られた知見を整理した。一連の調査結果を踏まえ、「L1文章化」は、文章の包括的要素、局所的箇所に関する十分な検討を可能とし、ひいては、英語テキストの発展に寄与する英語学習プロセスとして位置付けることができた。「L1文章化」は、「文章の包括的要素を整えること」と「局所的箇所を整えること」を下位プロセスとし、「英語による文章化」を志向した母語文章と母語センテンスを形成し、検討・評価し、適宜、修正するまでの一連の役割を内包することが望ましい。それらの成果を踏まえ、最終的に「初級・中級英語学習者向け英語ライティングプロセス・モデル」を構築した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、グローバル人材の育成を目指した大学外国語(英語)教育改革の現状を批判的に検討し、「考えること」を可能とする英語ライティング・プロセスについて理論的・実証的・実践的に検討したものである。具体的には、外国語(英語)ライティング方略としての「母語使用」に着目し、母語使用を取り入れるべき具体的な認知プロセスの検討、思考を促すツールや評価指標の検討、英語ライティング授業の開発と効果検証、ならびに英語ライティングプロセス・モデルの構築を行っている。

本論文の特色は以下の3点である。

1. 外国語(英語)教育における母語使用の有効性に関する精緻な検討を踏まえて、従前のライティング・プロセスに「L1文章化(Formulating in L1)」を組み込み、新たなライティングプロセス・モデルを構築したことによって、外国語教育研究や第二言語習得の研究領域に理論的インパクトを有する点。
2. 「L1文章化」の包括的要素(文章の構成・内容等)に関する教育的効果を高めるために、モジュールライティング技法の枠組みを用いた母語文章形成活動を行うとともに、そこでの学習成果を評価するルーブリックを開発し、それによる評価の信頼性・妥当性の検討を行うなど、教育実践上の有効なツールを提示している点。
3. 「L1文章化」の局所的箇所(各センテンスの可読性)に関する教育的効果を高めるために、機械翻訳の言語処理プロセスに着眼し、制限用語の留意事項を基礎とした母語パラフレーズ活動(伝えたいことを母語で論理的に組み立てる活動)を導入し、その効果を検証するなど、新たな研究への発展可能性を有する点。

第1章から第3章では、外国語(英語)教育における母語使用の有効性に関する先行研究のレビューが精緻に行われている。ライティング・プロセスに関して最も影響力のある Hayes & Flower のモデル(1980)および関連する国内外の代表的なモデルを取り上げ、主要なプロセスの理論的・実践的検討を行っている。外国語ライティング教育における L1 と L2 の関係については必ずしも一貫した結論が得られておらず、国や研究者によって結論が異なる(相反する)難しさがある点を指摘した上で、L1 使用が適した学習者の L2 レベルや L1 使用を促すべきプロセス、L1 使用が効果的なタスクを検討している。膨大に存在する研究を丁寧に整理し、英語ライティング・プロセスに母語使用を明確に位置づけたことは、学術的に重要な意義をもつ。

第4章から第6章では、先行研究のレビューを踏まえて導き出された視点を組み込んだ英語ライティング授業のデザインが検討されている。「逆向き設計」の考え方を援用して、獲得すべき学習成果の同定、評価方法・基準の明示化(ルーブリックの作成)、教育・学習活動(教員関与、協働活動、個人活動)の設定が行われた。各活動において使用されるツールも含めて、教育的効果を高めるための授業デザインが精緻にくみ上げられており、具体的教材や介入方法などを開発した点で実践的な意義をもつ。

第7章から第10章では、構築された授業実践に関して、「L1文章化」の包括的要素と局所的箇所それぞれに対して効果検証が行われている。実験群と対照群に分けて統計的に比較検証した結果、英語テキスト上の包括的要素の発展に対する「L1文章化」の有効性が示された。また、「足場かけ」としてのモジュール・ライティング枠組みの有無による英語テキストのクオリティの違いについて詳細な分析を行った結果、当該枠組みの有効性が示された。そして、制限言語の表現法に着目し、母語パラフレーズ活動が英語センテンスの可読性(局所的箇所)に及ぼす効果を検討し

た結果、量的には十分な結果が得られなかったものの、英語テキストの質的分析からは一定の効果が認められた。

このように、「L1 文章化」の英語テキスト・クオリティに与える影響を包括的要素と局所的箇所の観点から検証し、英語ライティング・プロセスの一環として担う役割が大きいことを明らかにしたこと、ひいては母語を礎とした英語ライティング教育への布石を築いたことが、本論文の最大の意義と言える。

口頭試問においては、以上のような本研究の価値に加え、高等教育のみならず、初等・中等教育の英語教育実践においても取り入れられるべき重要な知見が得られているといった意見が出された。その一方で、当該実践の中長期的な効果検証（追跡調査）の必要性や重要な成果の一つである母語パラフレーズングの類型化、各プロセスに必要なメタ認知の役割に関する検討などが、さらに探究すべき課題として挙げられた。しかしながら、これらの問題点は著者の今後の課題を明らかにするものであって、本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年2月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日以降